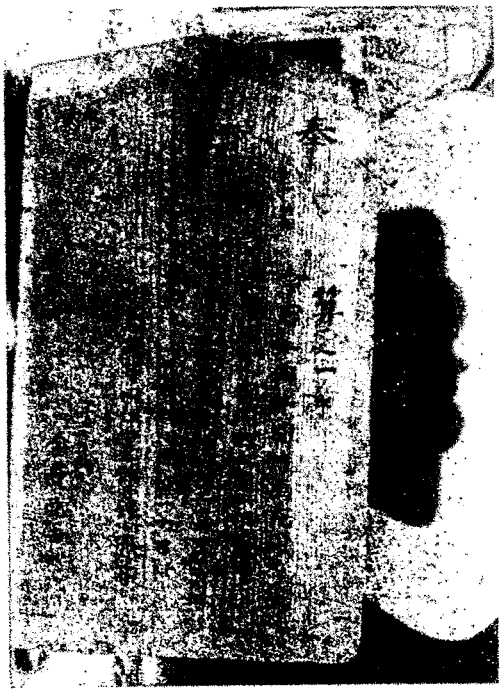
この時代は貨幣や度量衡の単位が不十進であるものが多く、例えば銭2貫418文は、96文が100文というように不十進数です。このため、このような位置に商を立てることが都合よかったのです。

改算記が刊行され普及した

万治2年（1659）に山田重正が「改算記」を刊行しました。この本は塵劫記とならんでよく普及した珠算書です。

算額を神社やお寺にかかげる風習がおこった

人々がよく目にする、神社やお寺に奉納された数学の絵馬のことを算額といいます。「算法勿禅改」（延宝元年1673）には、目黒の不動堂に算額が奉納されたことが書かれています。願いごとを絵馬に書いて掲げる現代と同じように、数学上達の祈願、上達した感謝のために奉納する風習がおこりました。後には、「自分はこんな問題が解けた」と人に知らせることに利用した人もいました。現在でも全国各地に算額が残っています。